

言され、その後は牧草に化学肥料や除草剤を使わず、牛のふん尿を畑の堆肥に使用。循環型の酪農を推し進めた。

15年には「全国青年農業者会議」で牛の病気予防や経営回復について発表。最高賞の農林水産大臣賞に輝き、その取り組みが高く評価された。

牧草地は56ヘクタール、デントコーン畑は10ヘクタールで、同認証は8月12日付で取得。牛を放牧し、ストレスを軽減させるなどアニマルウェルフェア（家畜福祉）にも力を注ぎ、来年には肉、再来年には牛乳でオーガニックの認証を得られる見込み。

鈴木さんは「無農薬、無化学肥料の牧草を食べた牛は疾病が減少して健康になり、その牛のふん尿で土を育てるサイクルができた。なにより牛乳が本当においしくなった」と話し、来年夏には敷地内に工房をつくり、自家製牛乳を販売する予定。

「多くの人の協力を得て、自然に負荷をかけない持続

可能な農業ができています。将来は広尾の給食に自分の牛乳を提供し、地域子どもたちを元気にしたい」と意欲を膨らませている。



牧草地とデントコーン畑のJASオーガニック認証を取得し、認証書を手にする鈴木さん

【農業ガイド1269号】浦幌の伊場さん農水大臣賞 白花豆で高収量 単収277キロ 19年度全国豆類経営改善共励会

2020年9月12日

【浦幌】町恩根内の畑作農家伊場満広さん（42）が、2019年度の全国豆類経営改善共励会（J A全中、J A新聞連主催）の「小豆・いんげん・落花生等の部」で、最高賞の農林水産大臣賞に選ばれた。高級菜豆「白花豆」の安定・高収量生産が評価された。

共励会は48回目。豆類の生産振興が目的で、生産技術や経営改善面で模範となる農家を表彰している。「小豆・いんげん・落花生等の部」の農林水産大臣賞は17年度に真野保さん（中札内村）、18年度に渡基文さん（更別村）が受賞しており、管内からは3年連続の受賞。

伊場さんは昨年、35ヘクタールのうち5ヘクタールで白花豆を作付け。10アール当たり収量は277キロ。18年産の花豆の道内平均（紫花豆など含む、176キロ）を大きく上回った。

今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、6月に書面で審査を実施。表彰式も中止となった。審査委員は「異常高温や台風被害が多発する中で単収277キロを得ている」「肥効調節型肥料と緑肥を活用。GPSガイダンスにより作業精度を向上させた」などと評価した。

伊場さんは「白花豆は安定して高く売れる。地域の若い人たちにも生産が広がるよう、安定収量のモデルになれば」と話している。



手間もかけて「白花豆」の高収量を維持する伊場さん

/ 不耕起栽培と緑肥で効果 効率の良い作業体系が目標 /



農林水産大臣賞を受賞した伊場さん

農林水産大臣賞を受賞した伊場満広さんに、白花豆の高収量の秘訣（ひけつ）や今後の目標について聞いた。

－多収の要因は。

不耕起栽培を10年以上続け、作物がストレスなく育ってくれる。土壌が粘土質で水はけの悪さが改善されず、方法を探していた。不耕起だと、自分の畑の場合、排水が良くなった。あとは緑肥。キカラシを小麦の後にまいており、土の中に良い影響を及ぼしている。4年輪作だが、緑肥を入れることで5年輪作のようになり、良い状態が保たれている。

－播種（はしゅ）は手作業と聞いた。

プランターでまくと縦畝はまっすぐだが、横がずれてしまうので手作業で行っている。通気性が良くなり、光合成もまんべんなく行える。製品率や品質が良くなる印象がある。